

松山大学経済学部2020(令和2)年度推薦入試合格者 課題「書評」

氏名：濱田 莉月

受験番号：1600006

対象とした本の番号：4

タイトル：オリンピック東京改造－交通インフラから読み解く

※ かならず万年筆かボールペンで「清書」すること(鉛筆・シャーペンは不可)。なお句読点(、。)や「」が行頭にくるときは、行末の字と一緒に書くかマスの右に書くこと。だれにでも癖字はありますが、丁寧に書くことを心がけてください。さらには最後に4枚をホチキスで綴じてください。

「骨格や循環器系が未成熟なまま、急激に肥大化した巨人のような都市」これは、東京を表す言葉であり本書の中で私が最も印象に残った一節である。人口が多く、交通インフラや都市整備が他の地域より進んでおり、一見発展しているように思える東京のどこが未成熟なのだろうか。

完全に組織された最も偉大なオリンピックと称された1964年大会から、約50年の時を経て再び開催されるオリンピックを控え、インフラ整備や都市開発が進んでいる東京。世界で類を見ない巨大な都市でありながら、その本質は未完成であるという。その原因は、1964年大会時に増え続ける人口を支える社会基盤が貧弱なまま都市改造を進めたことにあり、代表例として交通インフラが挙げられる。

バスメティアなど首都高や東海道新幹線は東京五輪のために造られたと報道されいくのを見たことはないだろうか。しかし、実際は逆である。ハントク才前だ、た東京の都市改造にオリンピックを利用したのだ。つまり、1964年大会がなければ東京は変わること

が出来つか、たと言、1も過言ではな、だろ
う。

1964年大会は、東京の発展を、大きなか
がシーや遺した。一方、2020年大会では何が
遺るのだろうか。代表的なガレガシを挙げる
なり、おそらく街づくりと持続可能性だろう。
しかし、その2つでは1964年大会に比べて、
2020年大会は遺るものが少な、気がする。

東京都では2040年代を見据えた都市づくり
のグランドデザインシケン、計画を策定してお
り、2020年大会はその通過点でしかな、のが
事実である。未来の話をあるため、一見オリ
ンピックとは関係のな、えくは事業であるが、
1964年大会と同様に都市改造にオリンピック
を利用し、るのだ。近々将来、人口が爆発
的に多、東京でも、人口減少が起ころと予想さ
れて、る。今は想像ができないが、2040年に、
人口が多い国塊ジニア世代が65歳を超える
ため高齢者の割合が高くなるのだ。更に、高
齢者を支える生活基盤が揺らぎ、都市が正常に
機能するこ、ことが困難にな、いく恐れもある
ため、未然に防ぐために都市改造や交通イン
フラの整備が必要なのだ。

東京は、まだ完全に交通インフラが整、い
い方針ではな、。同じく世界的に見、巨大な
都市であるロンドンではバスの24時間運行が

実施されおり利便性が高い。一方で、東京は首都高や東海道新幹線が造られていっても、渋滞やアクセス面で、利便性に欠けている。つまり、2020年大会までにさらに向上させないといけない点が多くある。しかし、それを悲観的に捉えるのではなく、むしろ伸ばしあうとする強みに捉えることで筆者は、東京が世界の他都市の追従を許さない都市に変貌する可能性があると考えている。

物は言いつつだ。私も筆者と同様に弱点を強みに変えることが大事だと思う。されに、弱みを理解することは都市改造の一一番の近道ではないだろうか。

オリンピックと東京改造。一見関係が無さそうに思えるこの2つ。交通技術ライターである筆者により、交通を中心とした視点から記された本書は、一般論とは少し違う角度から東京オリンピックと東京改造の関係について知ることができる。

「あの頃をもう一度は叶わぬ夢。」
2020年東京オリンピック開催が決定して以来、樂観的で夢みがちな言葉が飛び交う中で、あまりに辛辣だと感じたこの言葉。しかし、オリンピックを通して東京が直面していく問題や日本が抱える未来の問題など、必ずしも樂観視すべき現実を目の当たりにしたことによ

うやくこの言葉に納得できた。

1964年の輝かし、実績と同じようなことが
2020年も起こるだろうと、この期待をするのは
もうやめよう。運動技能を競い合う現代とは
違ふ、全員スマッシュアサダ様々な国の選手たち
がお互いの健闘を讃え合しながら楽しく競技
をしていた当時は状況が異なるのだから。

「あの頃をもう一度」は叶わないとしても、
2020年大会は歩き。あの頃とは違う形で今
後に実績を残すはずだ。たとえそれが一つの
通過点に過ぎなくとも、日本の今後を考える
良きかけとなることを祈りたい。